

- 1 派遣期日 ①令和5年9月23日（土）
 ②令和5年9月30日（土）

- 2 派遣先
①会場名 三鷹市市民協働センター 所在地 東京都三鷹市下連雀4丁目17-23
②会場名 みと文化交流プラザ6階 所在地 水戸市五軒町1丁目2番12号

- 3 研修内容
①・講義1「学校での経験や必要な配慮について」
 ・講義2「ブリティッシュコロンビア州（カナダ）の学校での、障害児やLGBTQの子
 に対する取り組みについて」
 ・ディスカッション「多様な子どもたちがともに育つ意味を探る」
②・講義「LGBTQ基礎講座」
 ・トークセッション、Q&A

4 感想

昨年度に引き続き道徳主任を任せていただき、今年度は新たに人権・性的マイノリティサポート主任を任せていただいた。

LGBTQについては「なんとなく」知っている程度の状態であったため、今年度の機会を生かして私自身、勉強をさせていただくことにした。

研修を受ける前から事前に勉強をさせていただくことで、内容もより一層理解することができた研修会になった。

(1) 今回の研修を通して学ぶことができたことをいくつか紹介していく。

① まず、「割合」について学ぶことができた。

血液型がAB型の方の割合が約10%程度、利き手が左利きの方の割合も約10%程度、日本人のメジャーな名字（佐藤、鈴木、高橋、田中）をもつ方の割合が5~6%と言われている。そんな中、日本人の性的マイノリティの方の割合は約3~10%ということであった。この割合を初めて聞いたとき、案外身近な存在であることを知ることができた。それだけでなく、勤務校に目を向けたときに、生徒数は3学年合わせて約300人が在籍している。その中で性的マイノリティの割合を考えると全校生徒の内、約10人~30人程度が該当し、各学級に1~3人程度在籍していることになる。その点からも、教師側の理解を深めるだけでなく、生徒側の理解も深めなければいけない課題が見えてきた。

② 次に「LGBTQ」や「SOGI」等の言葉についてである。

L レズビアン（性自認が女性で性的指向が女性に向く人）

G ゲイ（性自認が男性で性的指向が男性に向く人）

B バイセクシャル（性自認が男性か女性で性的指向が男性にも女性にも向く人）

T トランスジェンダー（身体の性と性自認に違和感がある人）

Q クエスチョニング（性自認が定まっていない人・定めたくない人）

クィア（性的マイノリティ全般を表す言葉）

SO [Sexual Organization]（性的指向）

GI [Gender Identity]（性自認）

これらも何を意味するのかを知っていた言葉もあるが、初めて聞いた（知った）言葉もあり、それぞれのもつ意味について学習できたことも、大変貴重な機会となる研修会であった。

- ③ 次に、講演会を通して学校での教育活動で必要な配慮について考えていく。

講演会の中で印象に残ったものの一つに「英語の授業での体験」がある。

その内容は、性的マイノリティの当事者の方が中学生のとき、ある日の授業で他己紹介で自身の紹介をされたときに「he（彼は・彼が）」と表現されたことに強い違和感を感じたと伝えていただいたというものである。英語圏では、[they]を用いて表現される場合もあり、最近では[they]は三人称複数の意味合いだけでなく、三人称単数の意味で用いられることもその時初めて知ることができた。その点から見ても、実は本当に身近な所にも気をつけなければ（配慮しなければ）ならないことが多く存在していることに気づくことができた。また、学校生活でよく使用される「男子」「女子」でのグルーピングをしたり、呼びかけをしたりしてしまう機会が多いことにも留意していく必要があると感じた。

- ④ また、海外でのLGBTQの活動事例も勉強になることが多くあった。

カナダのブリティッシュコロンビア州でのインクルーシブ教育を実際に体感されてきた現職教員の方からの話では、先進国の考え方や実際の行動や働きかけなど、参考になる部分が多くあった。特に、「インクルージョン」の大切さである。インクルージョンとは、特別なニーズをもつ学生が学習者のコミュニティの一員として完全に参加するインクルーシブな教育制度のことである。また、全ての生徒が教育プログラムのあらゆる側面において、学習、成果、卓越性の追求を公正に享受する権利があるという原則を示すものでもある。それを実践するためには、必ずしも普通学級への完全な統合をすればよいという考えではなく、有意義な参加や、他者との交流の促進を含むことを理解する必要があるとのことであった。このインクルージョンの考え方が日本全国の学校教育にも、もっと反映することができれば、学校教育そのものに厚みが増していくことだろうと感じた。

- (2) 今回の講演会や以前参加させていただいた講演会を通して学校教育へ生かすために、今年度人権・性的マイノリティ主任の立場で、各講演会で勉強させていただいたものを生徒や同僚へ伝達するために2つのことを実施した。

- ① 1つ目は、道徳の授業で伝えることである。全学年では実施することはできなかったが、担当する第3学年の全クラスで「LGBTQ」のことについて周知する機会をつくった。最初の生徒の反応は「聞いたことがある」「聞いたことがあるが、詳細はよく分からない」「なんとなく理解できる」とさまざまであった。講習会や勉強会を通して学んだことをパワーポイントやワークシートを用いて授業を進めることで、生徒の理解も少しずつ進んだように感じた。特に「LGBTQの方の割合」「LGBTQの方が困っていること」への理解が少しずつ深まった様子であった。

- ② 2つ目は、講師の方を招いての講演会の実施である。12月上旬にLGBTQの当事者である滑川友理さんを講師として本校へお招きして、全学年の生徒と教員に向けて講演会を実施していただいた。実体験や経験などを交えて生徒にも分かりやすく講演していただいたおかげで、生徒だけでなく、教員側の理解もより一層深まった様子であった。

以上2点の内容で実施をした結果、自分自身で学んだことを少しずつではあるが、学校教育へ還元できたと感じている。しかし、今の段階ではまだ周知ができただけで、あくまでもLGBTQへの理解の入り口にただただということをおぼろげに忘れることなく、今後の教育活動へとリンクさせていきたい。また、各教科指導でもジェンダーについて考えるきっかけが隠れていることを常に考えておきたい。何よりも、「性」に関わる事を教えることはとても大切なことであると同時に全教員にとっては簡単なことではないと感じている。そこで、今年学べたことを生かしながら次年度以降も自身の研修を積み重ね、どのように学校教育へ組み込んでいけるのかを考え、他の先生方と連携したり協力したりして実施していきたい。